

冷戦の終結を可能にした経過と諸条件を、カーター・レーガン・H.W.ブッシュ（父）の3代大統領ごとにまとめよう。

カーター大統領 (第39代 民主党 任1977-81)

- 1) 「人権外交」 1977年、【1: 】管理権を99年末でパナマに返還するという条約を結んだ。
- 2) 1978年のエジプトのサダト大統領・イスラエルのベギン首相の中東和平合意（キャンプデーヴィット合意）を仲介
→ エジプト=イスラエル平和条約（1979） No.196参照
- 3) 1979年にイラン革命（後掲）やソ連軍のアフغانستان侵攻（後掲）があって、共和党などから「弱腰外交の推進者」と叩かれることになり、支持を失った。

イラン革命 1979年

- i) イランは中東で最強とされてきた。しかし、国王【2: 】は親米・独裁政治を行い、イスラームの伝統を軽視し、民主主義を抑圧する政治をすすめたので、宗教者をはじめ多くの国民は批判的だった。石油輸出国機構（OPEC 1968年）成立後、70年代半ば以降、石油収入は増大したが、国民内部の格差は拡大した。1978年にはじまった反国王のストライキやデモは全国に広まり、1979年にはいって国王は国外へ亡命、1979年2月、ついに革命政府が権力を掌握した。だが、**革命勢力が権力を奪取するこの過程のみを指して「イラン革命」と呼ぶのではない。**
- ii) 1979年、革命勢力は、ウラマーの【3: 】（あるいは ホメイニー1902-1989）を最高指導者とする【4: 】を樹立した。政教一致である。

これ以前の革命は民族主義か社会主義であったが、これが宗教の復興による革命であることに世界は驚いた。従来、その価値を疑われることがなかった政教分離原則に真っ向から反する新たな価値観を世界に示した。

- iii) 2度目の亡命地パリから帰国したホメイニを指導者として、ウラマー（イスラム法学者）による統治体制をつくりあげ、イスラーム原理主義に基づく政治・外交を確立する過程も「イラン革命」に含まれる。シャリーアと合致する憲法も制定された。イラン革命は、イスラム教本来の原則に立ち返り、イスラーム的平等の実現と搾取の根絶をめざし、それを全世界に拡大しようとするものだった。イスラームの宗教と文化の再生をめざすもので、いわば「【5: 】」である。

パフレヴィー2世が見向きもしなかった一般大衆に目をむけ、一般大衆が利用できる病院、一般大衆の子弟が通える学校を積極的に建設するなどして、大衆の支持をえる一方で、一般大衆にもイスラーム的規律を守るよう厳しく指導。

- iv) 国王を支援してきたアメリカ合衆国との対立が激しくなり、**強烈な反米政策**を取った。産油量の削減で、1979年には、1973年を上回る第二次石油危機を発生させた。ソ連のアフغانستان侵攻（1979. 12）以降は**反ソ姿勢も明確**にした。

ソ連のアフغانستان侵攻 1979年 デタントは終わり、第二次冷戦（新冷戦）時代に入

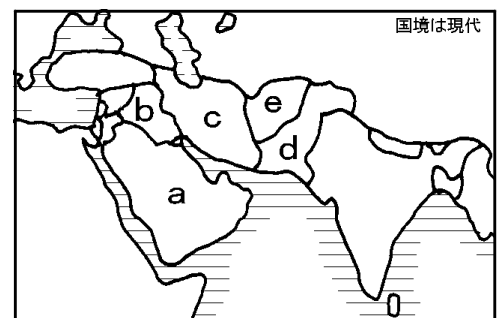
- i) 1973年までの経過
 - ①イギリス軍を退け独立を達成したアマーヌッラー・ハーンは、急進的な改革を進め、1926年には国王の称号をシャーに変え、**アフガニスタン王国**となった。
 - ②急激な改革はウラマー（イスラーム知識人）の反発を招き、混乱に陥った。1929年、ムハンマド・ナーディール・シャーがこの混乱を収め、翌年、シャーに即位した。このナーディール・シャーと息子のザーヒル・シャーの2代は**ナーディール・シャー朝**である。ウラマーとの妥協が図られ、**パシュトゥーン人色**※が強まった
 - ③急進改革派の不満をまねき、1973年、ザーヒル・シャーの従兄弟、ムハンマド・ダーウードがクーデターを起こし、ナーディール・シャー朝を倒し、**王政を廃止**した。しかし、混乱は続いた。
※ アフガニスタンの人口の45%を占める勇敢で誇り高い民族。タリバーンの支持基盤。タリバーン政権崩壊後にアフガニスタンの指導者となったハーミド・カルザイもパシュトゥーン人
- ii) 1979年12月 ソ連（ブレジネフ政権）は**アフガニスタンに侵攻**し、全土を制圧！ ～1989年2月（撤退完了）
米ソ関係は悪化し、これが【6: 】 = **1980年代の米ソ対立** のきっかけとなった。
《そのいきさつは次の通り》

アフガニスタンの親ソ派勢力がソ連の支援下にクーデターを起こした。それに乗じてソ連が侵攻し全土を制圧した。

カーター政権は、これを激しく非難。議会もSALT IIの批准を拒否した。ところでアフガニスタンってどこ？右図から選ぼう。 正解 e

a: サウジアラビア b: イラク c: イラン d: パキスタン e: アフガニスタン

《蛇足》「ロッキー」のシルヴェスター・スタローンが主演した1988年のアメリカ映画『ランボー 怒りのアフガン』は面白い映画ではある。元グリーンベレー隊員でベトナム帰還兵のランボーが嘗ての上司であるトラウトマン大佐救出のためにアフガン・ゲリラと協力して、ソ連部隊と戦うというストーリーは荒唐無稽であるが、ソ連軍が1989年までアフガニスタンに駐留したのは史実。制作者は反戦のメッセージを送ろうとしたようであるが、戦闘シーンが多く好戦的であると批判されアメリカではあまりヒットせず、日本で好評だった。1985年制作の『ランボー 怒りの脱出』でのランボーの最後の台詞「自分たちが愛したように、国にもオレたちが愛してほしい」は印象的である。



- iii) ソ連撤退（ゴルバチョフ政権 1989年2月完了）後のアフガニスタンは、たちまち内乱状態に陥った。この内乱に勝利してアフガニスタンの9割を実効支配したのは【7: 】である。

レーガン大統領

(第40代 共和党 任1981-89) は、ソ連との対決姿勢をとり続けた。

- 1) 国内的には行政改革を行い、社会福祉まで縮小して、「【8: 】」をめざした。
- 2) 前政権から引き継いだスタグフレーション（不況下の物価上昇）を克服すべく、減税と高金利政策を行って経済の再建をはかった。
レーガン大統領の経済政策は「【9: 】」として知られる。その主軸は、①減税、②歳出配分転換、③規制緩和とインフレ退治であった。①減税により、労働意欲の向上と貯蓄の増加を促し投資を促進する。②福祉予算などの非国防支出の歳出削減により、歳出配分を軍事支出に転換し「強いアメリカ」を復活させる。③規制を緩和し投資を促進する。④金融政策（高金利政策）によりマネーサプライの伸びを抑制してインフレ率を低下させる。
減税しながら軍事支出を増大させたので、結局、巨額の財政赤字と累積債務の劇的な増加をもたらし、退任時には就任時と比較しておよそ200%増加していた。
- 3) 対外的には「強いアメリカ」を誇示、ソ連を「悪の帝国」と非難し、核兵器の軍備拡大を行い、ソ連との対決姿勢を強めた。1983年、「アメリカや同盟国に届く前にミサイルを迎撃」し、「核兵器を時代遅れにする」手段の開発を命じた。衛星軌道にミサイル衛星やレーザー衛星、早期警戒衛星などを配備、それらと地上の迎撃システムが連携して敵国のICBMを各飛翔段階で迎撃、撃墜するシステムで、これを【10: 】(SDI) という。通称スターウォーズ計画。
- 4) 「レーガン・ドクトリン」によってアメリカは、ラテンアメリカの社会主義政権や反体制ゲリラに対して、タカ派的外交姿勢をとりはじめる。ニカラグアのコントラやエルサルバドル軍、グアテマラ軍、及び極右民兵組織を支援し、CIAを使って各国軍の死の部隊による「汚い戦争」を支え、結果的にニカラグア内戦、エルサルバドル内戦、グアテマラ内戦を激化させて当該地域で何十万人という犠牲者と、何百万人もの亡命者を出す要因を作った。
- 5) 1983年10月25日、カリブ海の元英領の島国【11: 】は、政変を繰り返してきたが、共産主義によるクーデタが起きたため、レーガンは侵攻を決断した。アメリカにとってベトナム戦争以来初の大規模な軍事行動で数日間で完全制圧し、親米政権を発足させた。1984年ロサンゼルスオリンピックをソ連を含む東側諸国がボイコットする口実にされた。実は1980年のモスクワオリンピックで西側諸国がソ連のアフガニスタン侵攻を非難してボイコットした事への報復である。

レーガン大統領 2 期目 1985～

(第40代 共和党 任1981-89) は、ソ連との対話を始める。

- 1) 第二次冷戦と呼ばれる両国の対立は、言うまでもなく、軍備拡大に迫られた双方の経済に絶大な悪影響を及ぼした。アメリカの場合は「【12: 】」が深刻化した。
財政赤字、貿易赤字は1960年代から指摘されているがそれは「双子の赤字」とは言わない。1980年代のそれが「双子の赤字」と呼ばれるのは、深刻さが桁外れだからである。1986年にはアメリカは純債務国に転落した。
①「新冷戦」下で必要とされる軍備拡大のため、財政赤字は更に深刻化した。
②貿易赤字 例え日本からの鉄鋼、カラーテレビ、工作機械、自動車は著しい輸入超過となって貿易赤字を増大させていた。日本企業は2度のオイル・ショックを乗り越え経済体質の強化に成功し、驚くべき低コスト、高品質の工業製品を集中豪雨のようにアメリカに輸出し続けていた。→「日米貿易摩擦」No.206参照。
- 2) 1985年9月22日、G 5 で形成された【13: 】は、アメリカ合衆国の対外不均衡解消を名目とした協調介入への合意であり、対日貿易赤字の是正を狙い、円高・ドル安を誘導する政策である。日本をはじめ同盟国あげてのドル安政策にもかかわらず、アメリカ経済は一向に良くならなかった。そしてついに、1987年10月19日には、ニューヨーク株式市場で株価の大暴落が起きた。これをブラックマンデーと呼ぶ。世界同時株安に発展、経済政策の失敗を露呈した。No.206参照。
- 3) 経済停滞の大きな原因となっていた軍事費を削減するため、1987年に米ソは【14: 】を締結した。これは米ソが初めて核兵器削減に合意した画期的な条約である。この他にも、レーガンはゴルバチョフと、ジュネーヴ（1985年11月）、レイキャビク（1986年10月）、ワシントンD.C.（1987年12月）、モスクワ（1988年6月）と四度にわたって首脳会談を行っている。主な議題はいずれも軍縮と東欧問題。（後掲記事と重複）

グラスノスチ（情報公開）、ペレストロイカ（改革）

- i) ソ連は1980年代に入り経済停滞が著しくなった。その原因は、アフガニスタン侵攻と10年に及ぶ駐留で軍事費が増大し、ソ連経済は一層の停滞を見た。ソ連消滅の最大の原因は、この1980年代の経済不振にある。それは、核軍拡競争の重荷を負った状態で、無能な官僚が指導する集権的計画経済の下で、しかも企業間競争がない中で、【15: 】製造、ソフト開発などIT系技術集約型産業の成長が決定的に立ち遅れたことだと言われている。《重要》1982年のブレジネフ死去後、アンドロポフ（任1982-84病死）、チェルネンコ（任1984-85病死）と短命政権が続いた。（笑い事ではないが、文字通り短命だった。両人とも病死。）
- ii) 1985年、書記長（任1985-91）に就任した【16: 】は①グラスノスチ（情報公開）を基本に、②【17: 】（改革）を実行した。①グラスノスチとは、従来のイデオロギーによる秘密主義を廃し、大胆に情報公開を進める、とするもの。【18: 】原子力発電所事故を、ソ連の高級官僚は西側研究機関が指摘するまで隠蔽し、グラスノスチの不徹底が露呈した。これが契機となってグラスノスチもペレストロイカも一層推進された。②ペレストロイカとは、自由化・民主化を進めたことも重要だが、実はソ連社会全般にわたる大規模で壮大な改革運動のこと。一党独裁政権が続いたために腐敗が進んでいた政権を立て直すには、回避できない課題だった。長年の間に肥大化した官僚制度を改め、ソ連共産党の出世階段を昇ってきたイデオロギーだけの幹部に替えて、専門の見識を持つ知識人を登用し、経済の再建をはかることも重要な課題だった。ゴルバチョフは、真剣に「社会主義の再生」を試みたのであって、決してソ連共産党の解体やソ連邦の消滅を意図していたわけではない。しかし、ペレストロイカは彼の意図を越えて進められた。

No.209へつづく